

## 第六章 知多臨海工業コンビナート構想

### 1 臨海工業コンビナート誘致を考える

#### 用水の維持管理費を

久野さんは、愛知用水を始めるにあたって山崎延吉先生（最初に決意を表明し、その後、相談ののってもらった）、岡田菊次郎（元県議会議長、明治用水理事長）、神戸真（当時現県議会議長、木津用水経験者）の三氏に昭和二十四年八月末、加藤周太郎（名古屋木材社長、当初から用水計画の賛成者）から借りた乗用車で（当時はまだ自動車が普及しておらず、篤志家の好意にすぎるしか方法がなかった）、愛知用水計画の現地を見てもらい、助言や協力をお願いした。

明治用水多年管理責任者岡田菊次郎の意見。「用水を作るのはよいが、その維持管理費が大変だぞ。俺の方は水源付近の山を買って、そこに木を植え、いまその木が三、四十年になつて、間伐的に切り出せて、それを売った金を維持管理費に廻して助かっている。愛知用水も何か考えたほうがよいぞ」



岡田菊次郎

何とかしなければならぬと思案の末、思いついたのが、昭和の初め、久野さんが自分の結婚記念に近所仲間七人と三河の前芝海岸に行つて、海苔の種と網を買つてきて、八幡浜で海苔栽培を始めたこと（これが知多半島での海苔栽培の最初であった）。また、ついでに小舟を買つて、うたせ網を買つて、小魚や海藻を取り、干して、売れるものは売り、残りは肥にしている。それで、上野、横須賀、八幡、常滑の海岸は遠浅で埋立てに適していることを知っていた。

ここを埋め立てて工場を誘致して、工業用水を供給し工業用水代金で、用水の維持管理費の軽減をしようと考えた。そこで、名古屋港管理組合に行つて、知多半島西側の埋め立て工業計画を聞くことにした。

#### 港湾関係者の意見を聞く

名古屋港の管理組合は、日長（現知多市）と鍋田（現弥富町）を結ぶ線までが名古屋港域で、二年交代で愛知県知事と名古屋市長が管理者となり、運輸省から専門家が駐在して管理実務に当たり、埋め立てや工業用地の造成は、管理組合の計画部長の担当であり、名古屋港の区域内では、上野町地先が埋め立て一区、二区。横須賀が三区。知多町地先が四区——の埋め立て計画ができていた。そして、計画部長は岩田計郎、工事課長は川口堯<sup>たかし</sup>、全体を統括するのは副管理者前田一三の諸氏であることがわかった。「よし、これだ」ということで、久野さんは名古屋港の将来計画図をもらつて帰った。

これを行政的に取り締まっているのは運輸省の第五港湾事務所、所長は久野さんが旧知の原口元神戸市長の御子息であることがわかった。原口管理事務所長に会つて、知多西海岸

を埋め立てして、臨海工業地帯を造成することを話したら大賛成であった。

### 臨海工業地帯造成の先進地、東京湾視察

何といっても、臨海工業地帯の先進地は東京湾の千葉海岸である。上京して伊藤局長に会い、元農林大臣石黒忠篤先生に用水計画の話をして、アメリカのT・V・Aの資料をいただき、激励されて、いよいよ決心を強くし、計画がふくらんだ。そして、久野さんが「どうしたらよいか」と私に相談されたので、「私の一年先輩の永井幸喜ゆきよしという人が、現在は京葉産業株式会社けいあ産業株式会社の社長をしており、彼の紹介で県に頼むのがよいでしょう」と言うのと、「では、さっそく出かけよう」ということになり、私も一緒に千葉市内の永井社長を訪ねた。

永井社長は、三重高等農林学校土木科の学生時代は、陸上競技部のマネージャーで、私は親しい仲。卒業後、農林省に就職したが、期するところがあって、半年で退職、京都大学農林経済に入学。京大卒業後、三菱産業に入社、千葉臨海工業地帯造成の担当となり、主として電気部門と石油部門を担当し、臨海工業地帯の背後地に三菱産業で石油供給施設（石油スタンド）を建設し、業績を挙げた。そこで、三菱産業の下請け会社、京葉産業株式会社を設立、独立して、社長となり、千葉県でも有数の総合商社となっていた。

永井社長の紹介で、千葉県庁の担当者吉岡氏の案内を受け、まず幕張の川崎製鉄を見せてもらった。ここでは、埋め立て地の耐力と、工業用水の供給が最重要で、当地幕張地区に立地する川崎製鉄所は、利根川↓印幡沼↓幕張と導水、毎秒一・五立方メートルの水を取水しているとのこと。鉄一トン作るのに真水が四一トン必要と教えられた。

千葉の臨海工業地帯は、中央地区は輸入穀物の製粉施設、日清製粉などが占め、その先が

エネルギー（石油）の輸入精製に出光興産が当たっており、水は房総半島の溪流取水で、地下水も含めて県営水道事業で供給しているとのことであった。

〔中部地区製鉄所立地条件の概要〕

その当時、中部経済連合会が、製鉄の専門家に伊勢湾内の製鉄を中心とした大工業コンビナートの適地調査を依頼した。報告書の要点を記載すると次のごとくであった。これは、昭和三十二年八月より調査を始め、翌三十三年春報告されたものである。

(1) 適地

- (i) 愛知県半田市武豊町地区、衣浦臨海工業地帯
- (ii) 同 上野・横須賀地先、名古屋南部臨海工業地帯
- (iii) 名古屋市荒子川下流地区
- (iv) 愛知県鍋田村地先西部地帯
- (v) 三重県桑名市南村干拓地
- (vi) 同 四日市市富田浜地帯

(2) 生産規模

鉄鉄	年産七〇万トン
鉍塊	〃 六〇 〃
鋼材	〃 四五 〃

として将来一〇〇万トン程度に拡充できるものとする

(3) 立地の基本条件

- (i) 工場敷地 五〇万坪（二六五ヘクタール）以上
- (ii) 地耐力  $80 \frac{t}{m^2}$ 以上
- (iii) 用水 浄水毎分五立方メートル以上（一日七、二〇〇立方メートル以上）
- (iv) 港湾 水深一二メートル以上の岸壁五〇〇メートル以上  
九・五メートル以上の岩壁五〇〇メートル以上

(4) 適地の選定

(3)の立地条件をクリアするもの

(a)名古屋南部臨海工業地帯

(b)桑名四日市臨海工業地帯

の二地点にしぼられたが、いずれが可かを判定するには現時点の判定は困難である。

地耐力では名古屋南部臨海工業地帯が優り、工業用水の取水については桑名四日市臨海工業地帯が優るが、用水問題については愛知用水に貯水池の建設と上流水源が新たに得られるならば名古屋臨海工業地帯が優るといふ結果になり、なお今後の情勢、進出工場の再調査によって決定せられる問題である、という結論であった。

## 2 愛知用水実験農場の設立

戦後農業改良普及のため、県の職員として市町村単位に農業改良普及員が置かれた。その技術指導の拠点として、農業改良実験農場が郡単位に、県農業試験場の展示場として置かれた。

これが昭和二十四年四月一日より、農業協同組合愛知教育連合会の下に配置替えとなった。知多半島には、

知北農場（場長氏原柳一、大府市名高山）

知南農場（場長近藤林平、上野間）

この農場を愛知用水の技術拠点とした。知北農場の場長氏原柳一は有名な氏原光二氏の末弟であり、『養鶏の日本』の高橋広治の婿であった。新城農蚕、愛知県農業試験場講習場出身、（酒豪の快男子、海軍で南方島嶼防御禦から復員、大正六年、北設楽郡神田の生まれ）、愛知用水は主として次の実験項目を依託した。

- 1 稲の特殊早植えと田植え時期の分散（早中晩）
- 2 水稻の陸作対乾性の高い品種の選択
- 3 田畑輪換による増収効果
- 4 陸稻灌漑による増収効果

そのため久野さんは自家用の鉄パイプ三〇〇メートルを寄贈して灌漑設備を強化した。

### 3 稲の減水深調査（稲の水の必要量、昭和二十四年四月十日）

東京大学狩野博士来名。

・知多半島中央地区（阿久比村植大）半田農高生、椰野、新美担当、責任者 浜島辰雄。

・西加茂郡三好地区 三好町産業課長久野尚比古担当。

その設備、記録方法は狩野博士直接指導。これによって、水稻の単位当たりの水の必要量が明確となった。

### 4 名古屋港管理組合の埋め立て計画を聞く

東京湾臨海工業地帯を見た久野さんは、自信を得て、知多西海岸にも臨海工業地帯の造成を計画するべく、胸をふくらませて、名古屋港管理組合の前田副管理者を訪問して、京葉地区の見学を話し、ぜひ知多西海岸にも臨海工業地帯を造成すべきであると話した。前田副管理者は、久野庄太郎が何者であるかということも知らず、岩田計画部長を呼び、臨海工業地帯を造成するには、まず地耐力の調査が必要であるが、その金もない。膨大な工業用水を取水するメドも立っていないと身の入らない話ばかりであった。

久野さんは地耐力調査には、どのくらいの費用がかかるのかと聞くと、経費は運輸省と商工省から半分ずつ出るのが、双方の意見が合わず、予算化がむずかしい。金額は五十万円もあればできるのだが、両省にまたがっていて容易でないと聞いた。久野さんは、「それく

らしいの金なら、何とかなると思いますが、埋め立ての方の仕事を進めて下さい」と言った。副管理者も計画部長も、専門家でも手に負えず困っているのに、素人のくせに偉そうなことを言うな、と顔を見合わせていた。

さつそく久野さんは商工大臣は誰かを調べてみると、吉野信次である。これは桑原官選愛知県知事の前任者で、翼賛会でよく知った間柄だったので、即日電話して、明日なら家にいると聞き、浜島と二人で上京した。

吉野商工大臣の家は、目黒駅近くで、三階建ての洋館、一階が駐車場。久野さんは久闊を述べ、

「時に私はいま、愛知用水という農業用水の計画を実現するために全力をつくしておりますが……」

と、例の大風呂敷から地図を出して、いままでの経過を説明。

「この仕事は農業だけでは、採算が取れない。ぜひ、この知多の西海岸を埋め立てして、工業を起こし、計画を総合的にし、工業用水にも使ってもらって、農業用水の負担軽減をはかりたい。そのためには埋め立て地の地耐力を調べなければならぬが、名古屋港管理組合には調査費がないとのこと。調査費は商工省と運輸省から出るそうで、何とかならないかと相談に来た」

と言うと、吉野商工大臣は、あの大きな目玉をくりくりさせてしばらく久野さんを眺めていたが、

「偉い！ てめい、ただの百姓ではないなあ！ いったい、いくらいるんだ」ときた。

五百万円と言っても出してくれそうな雰囲気であったが。私が指で一本出したら、久野さんは間髪を入れず、「百万円」と言った。

吉野大臣は、

「よし、わかった。君が名古屋に汽車で着くまでに電報を打ってやる」

と即答された。ああ！来てよかった。久野さんの顔に安堵の色が表れた。まったく瞬間の話であった。それから、いろいろと二人で戦前戦後の話が交わされたが、ともに忙しい人間同士、別れを惜しんで吉野邸を辞した。いつもながら、金山橋の弟の家から持って来た肉の土産は忘れなかった。

その後、二、三の要件をすませて、帰名。二、三日経てから管理組合に吉野商工大臣との会談の結果を報告しようと出かけた。驚いたことに、岩田計画部長の所に行ってみると、態度が前とまるで違う。さっそく前田副管理者の部屋に案内されて、吉野商工大臣からの臨海工業地帯埋め立て地の調査費、百万円の通達があったと、驚きと、よろこびで、下にもおかぬ待遇であった。「それはよかったですね」と手を握り合った。それ以降は、何事も相談を受け、内部の人間のような待遇を受けるようになった。

## 5 愛知用水計画の再検討

愛知用水計画の構想を、満州において豊満ダムの計画をした日本公営の久保田豊に再検討を依頼した。愛知用水は戦後初めての総合開発で、国の総合開発審議会の推薦すいせんもあったようだ。

私は満鉄時代に豊満ダムについては現地を訪れ、つぶさに研究してよく知っていた。今までの資料は全部提供したから、何か奇抜な案を提供してくれるだろうと期待した。

昭和二十四年十一月十日、十一日、発電の鬼と言われた久保田豊、萩原俊一、高橋三郎を案内して入鹿池、兼山取入口、丸山ダムなどの調査をして疏水館泊、農林省から千葉進計画部長も参加した。

計画の核心であるメインダムをどこにするかが最大の問題であったが、公営案は、入鹿池の現在の水路橋付近に高さ八〇メートルのダムを建設し、貯水量約一億立方メートルに今渡の発電所下流から深夜電気でポンプアップする案が出され、深夜電気を使うのは面白かったが、池野村今井の水没家屋五〇〇戸をどうするか。また、ポンプアップした水で農業がペイするかどうか。

丸山ダムの高さ<sup>かさあ</sup>上げ、洪水調節案を期待したが、だめであった。

(註) 土質試験所の守谷所長は私と三重高農で一年違いの陸上部の部員で、兄弟以上の仲。山田光敏は京大土木、昭和二十九年度の農林省愛知用水調査団員で、当時、愛知用水公団建設部職員。